

2025 年 2 月 28 日発行

九州産業大学『基礎教育センター研究紀要』第 15 号 別刷

合格直後のプレ・エントランスデーの追加開催 ー開発と効果検証の試みー

九州産業大学基礎教育センター准教授

中世古貴彦

九州産業大学基礎教育センター准教授

森 誠子

九州産業大学基礎教育センター講師

林 政喜

九州産業大学基礎教育センター事務室長

川口 晋一

【事業・活動報告】

合格直後のプレ・エントランスデーの追加開催

—開発と効果検証の試み—

中世古 貴彦, 森 誠子, 林 政喜, 川口 晋一

I. はじめに

全国的にいわゆる年内入試が拡大し、各大学では早期に合格を手に入れた入学（予定）者の学習習慣の維持・向上、基礎学力の確保などが以前にも増して課題となっている。それは同時に、そうした目的のために実施される入学前教育の開発や効果検証が、多くの大学で課題となっているということでもある。

九州産業大学では、毎年2月に実施されるプレ・エントランスデーをはじめ、従前から様々な入学前教育を展開してきたが、2023（令和5）年度からは、年内にもプレ・エントランスデーを開催（ある意味で再開）することとなった。本稿の目的は、プレ・エントランスデーの年内追加開催について、実施に至るまでの経緯、当日の内容、入学半年後（本稿執筆時点）で確認可能な効果等について記録することである。

II. プレ・エントランスデーの追加開催

1. 九州産業大学の入学前教育の全体像

九州産業大学及び造形短期大学部では、2024（令和6）年度入試において総合型・特別総合推薦・学校推薦型・外国人留学生推薦選抜で合格した入学予定者約1,400名を対象に、2023年12月23日及び2024年2月10～13日（内2日間）に入学前教育の一環としてプレ・エントランスデーを開催した。入学前教育の実施目的として、大学生活にスムーズに移行するための学習習慣の定着等も一般的に重視されるが、今回追加開催した12月の入学前教育では、入試合格から入学までの間における大学入学へのモチベーションの向上及びコミュニケーション力の向上、学部内における対人関係の構築を主眼としていた。なお、2月実施の入学前教育では、大学で学ぶための基礎学力の向上を主眼としていた。以下、具体的な取り組み内容を記す。

まず、12月についてである。内容は、①学長挨拶、②基礎教育センター所長挨拶、③学部での学び紹介、④昼食・休憩、⑤レクリエーション、⑥オフィスアワーであるが、学内施設の

表1 12月に追加開催したプレ・エントランスデーの内容等

	項目	時間 Aグループ	時間 Bグループ	内容
①	学長挨拶	10:00-10:05	14:00-14:05	合格者に向けたメッセージ 大学への期待感やモチベーションを向上させる
②	基礎教育センター 所長挨拶	10:05-10:25	14:05-14:25	入学前教育の目的、重要性の説明
③	学部での学び紹介	10:25-11:30	14:25-15:30	⁽¹⁾ 学生広報キャスターから、各学部の特色などを紹介
④	昼食・休憩	11:30-13:00	12:30-14:00	昼食及び着替え
⑤	レクリエーション	13:00-15:30	10:00-12:30	大楠アリーナでのレクリエーション 簡単なスポーツを通じ、コミュニケーションを深め仲間作りを行う
⑥	オフィスアワー	15:30-16:30		eラーニング課題のフォロー

注 (1) 本学の魅力を学内外に発信する学生の育成を目的とした学部協力型授業「実践コラボ講座（KSU学生広報キャスター）」を受講し、最終審査を終え北島学長より「KSU学生広報キャスター」の認定証が授与された学生。

収容人数等の関係から、表1に示したようにAとBの2グループに分け実施した。

次に、2月についてである。こちらは、2月10・11日に経済学部・地域共創学部・芸術学部・国際文化学部・人間科学部の対象者を、2月12・13日に商学部・理工学部・生命科学部・建築都市工学部・造形短期大学部の対象者を集めて行った。内容は、①学部長挨拶、②学部独自授業、③語学教育センター実施の英語授業、④基礎教育センター実施のチームワークによる課題解決授業である。

さらに、入学予定者は入学前課題として、学部独自の課題に加え、eラーニング課題を合格発表直後から3月上旬にかけて行っている。また、eラーニング課題に取り組んだ効果を図るため、eラーニングに取り組む前後において、実力テスト・期末テストをそれぞれ課している。具体的な内容は表2のとおりである。

なお、注記・再説しておく、上記の2月開催のものに加えて、2023年度から、年内にもプレ・エントランスデーを実施することになったことで追加開催したのが、12月のものという次第である。

2. 追加開催分のプレ・エントランスデー

(1) これまでの経緯

2010（平成22）年度から2015（平成27）年度まで一部の学部が自主的に実施していたAO入試合格者対象のスクーリング（学部によって12月または2月のどちらかに実施）を、2016

合格直後のプレ・エントランスデーの追加開催

表2 従前からの入学前課題の内容等

	項目	内容
①	学部独自	各学部内で検討
②	eラーニング	実力テスト（合格発表後）
		課題Ⅰ（合格発表～2月上旬） 文系等：国語・数学・英語 理系：国語・数学・英語・物理・化学 ※物理・化学は学部学科等により異なる
		課題Ⅱ（2月上旬～3月上旬） 全学部：国語・数学
		期末テスト（3月上旬～中旬）

注：本文に記したように、来校型のプレ・エントランスデーを例年2月に開催しており、表中の入学前課題と併せて従来からの入学前教育を構成していた。

（平成28）年度から基礎教育センターが主体となって「プレ・エントランスデー（12月）とスクーリング（2月）」という形で全学部一斉に実施することとなった。

当時の12月プレ・エントランスデーでは、入学予定者向けのプログラムは午前・午後に設定された各学部の授業のみで、実施内容は各学部委ねられていた。一方、保護者向けのプログラムとして、大学の方針や教務部や学生部からの説明会だけでなく、保護者を対象とした施設見学など、多くの保護者向けのプログラムが準備されており、入学予定の生徒だけでなく、その保護者にも大学紹介を行うイベントとして実施されていた。

一方で、大学入学前に2回（12月と2月）来学することに対し経済的な負担が大きいとの意見があり、2018（平成30）年度からは、12月実施のプログラムを廃止し、2月に「プレ・エントランスデー」として学部授業や英語、コミュニケーションスキル向上のカリキュラムを行う現在の形式となった。

その後、各学部の授業内容や英語、対人コミュニケーションスキルの授業内容など、若干の見直しを行いつつ現在まで取り組んできたが、入学前教育の強化の一環として令和5年度から、12月に本学に出校した形でのプレ・エントランスデーを復活（再開）させることとなった。

（2）新プログラムの構築

12月のプレ・エントランスデーの復活に際し、鶴田和寛基礎教育センター所長と意見交換をする中で、実施の狙いを「高校生が来春4月の入学を楽しみに思えるような、ワクワク感を創出するプログラム」を最大のテーマとすることとした。また、各学部教員の負担増を避けるため、極力基礎教育センターの教職員及び学生アシスタントのみで実施することを念頭にプログラムを構成することとなった。

初めに検討したのは、メインとなる友人関係を構築するプログラム（レクリエーション）だが、前提として天候に左右されない大楠アリーナ 2020 を活用したスポーツ大会を検討した。バレーボールをはじめ、バスケットボール、ドッジボールなど多くの競技を検討したが、性別やスポーツ経験の有無に関わらず多くの人が、簡単かつ短時間楽しめる競技がなかなか決まらずプログラムの構築に苦慮したが、最終的に案として浮上したのが、大縄跳びであった。大縄跳びであれば14～15人が一斉に参加する事ができ、運動の苦手な生徒でも縄を回す担当をするなど、色々な参加形態が想定できた。ただ、大縄跳びを500人規模の大人数で実施するイメージが湧かず、専門家である日本ジャンプロープ連合福岡県支部の行正麻衣氏に相談することとした。行正氏は、久留米大学附設中学校の体育科教員である傍ら、日本ジャンプロープ連合福岡県支部の代表を務める人物で、相談に伺うと「大人数でもできますよ！きっと運動が得意ではない高校生でも楽しめると思います！」と即答していただき、一気に不安が解消した。その後、何度か打ち合わせを重ね、必要なロープの購入や実施方法など、一気にプログラムの設定が進んだ。

次に、入学に向けた不安解消のプログラムとして、自分が進学する学部の学びを紹介する「学部での学び紹介」プログラムの構築にとりかかった。当初は各学部教員から簡単に説明をしていただく事も検討したが、学部の先生方に負担を掛けないという前提があったので、同時に実施していた「実践コラボ講座（KSU学生広報キャスター）」の受講生（学生）から説明をすることとなった。なお、国際文化学部など一部の学部には学生広報キャスターの受講生がおらず、そういった学部は、各学部へ説明者（学生）の推薦を依頼するかたちで説明者を選定することとした。各学部長からは「学生がちゃんと説明できるのか？誤った内容を説明されたら困る。」といった厳しい意見が多く寄せられたが、事前に各学部長、学科主任へ説明内容をプレゼンすることを想定していたため、その際に指摘していただくことで了承された。

また、最大の懸案であった参加する入学予定者の経済的負担増に対する対応について、学長から旅費の一部を補助する許可をいただき、入学予定者が在住する地域（所在地）に応じて旅費の一部補助することとなった。最終的に、学長特別予算から総額約80万円（1人最大8千円）を支出し、参加者の負担軽減を図ることとなった。

（3）当日の様子

先述のように、プログラムは2023年12月23日（土）に、学部毎に午前と午後で内容を反転させる形式で実施することとなった。当日の様子は図1を参照されたい。出席者は、対象者1,485人に対し、1,010人（出席率68.0%）となり、ほぼ想定通りの参加者数であった。欠席理由としては、高等学校の授業や家庭の事情などが多く、次いで時期的にも体調不良（新型コロナ

図1 実施当日の様子



注：上から順に、学長挨拶、大縄跳び、学部での学び紹介の様子。

ナウウイルスやインフルエンザ）での突発的な欠席が多かった。

当日は、基礎教育センターの教職員そして学生アシスタントが協力して実施にあたったが、受付の時点で、大縄跳びのチームを通知する作業が想定以上に時間を要し、大混乱であった。最終的に若干の遅れでプログラムを開始することはできたが、前途多難な幕開けであった。

ただ、実施に協力していただいた行正氏をはじめとする日本ジャンプロープ連合福岡県支部の方々、学生広報キャスター、基礎教育センターの教職員そして学生アシスタントの協力もあり、その後はスムーズにプログラムは進んでいった。

特に、大楠アリーナ2020で実施した大縄跳びでは、生徒たちが歓声を上げながら楽しそうに交流する姿がみられ、実施の手応えを感じた。事後アンケートでも、「縄跳びのおかげで初対面の人でも話す事が出来た。」「SNSを交換出来た。仲良くなれた。」といったコメントが多く見られ、簡単なスポーツを通じてお互いの緊

張を解き、友人関係のスムーズな構築に貢献できたと感じた。なお、実施にあたり、突発的なケガや体調不良等の対応のため、保健室にも待機を依頼していたが、大きな事故もなく、無事に実施できたことが何よりも良かった。

また、学生広報キャスターからの「学部での学び紹介」については、実践コラボ講座（KSU 学生広報キャスター）の担当教員や基礎教育センター山下聖也職員に、準備段階から何度も資料の確認や打ち合わせを行って補助していただいた成果もあり、参加した入学予定者から「先輩の説明がとても分かりやすかった。ホームページやオープンキャンパスでは分からなかった内容が知れてよかった」という感想が寄せられるなど、大変好評であった。入学予定者と年齢も近い先輩大学生が、自ら作成した資料をもとに自分の言葉で説明する姿を見て、参加した生徒も大学生となった自分の姿を想像できる良い機会となったようであった。

Ⅲ. 年内追加開催の結果

1. 事後アンケートの結果

追加開催分のプレ・エントランスデー実施後に、「学部での学び紹介」と「レクリエーション」の満足度とその理由についてのアンケートを参加者全員に実施した。対象は1,010名であり回答率は97.7%であった。

学部での学び紹介においては、満足（81.9%）、やや満足（16.5%）、どちらともいえない（1.5%）、やや不満（0.1%）、不満（0%）であり、全体の98.4%の参加者が満足した結果であった。理由として、「学部で学ぶ内容が知れた」「先輩の説明が上手で分かりやすかった」「スライドが分かりやすく興味が湧いた」「入学後のことを詳しく知れた」という回答が多く見られた。また、「ホームページやオープンキャンパスでは分からなかった内容が知れてよかった」という意見もあった。参加者全体が肯定的な印象を持ったことが分かった。

レクリエーション（大縄跳び）においては、満足（75.3%）、やや満足（19.4%）、どちらともいえない（4.1%）、やや不満（1.0%）、不満（0.2%）であり、94.7%の参加者が満足した結果であった。肯定的な意見として、「多くの人と話す機会が出来た」「友達が出来た」「同じ学部で友達ができるか不安だったが、縄跳びを通じて仲が良くなって良かった」「コミュニケーションの場として面白かった」「楽しかった」などがあった。否定的な意見として、「時間が長かった」「少し疲れた」「他の競技でもよかった」などがあった。次年度の実施に際して、時間や休憩時間などを調整する必要があると考えられる。

アンケートの自由記述では、「[引用者注：遠方からの参加のため] 金銭的負担が大きいですが、それでも参加してよかった」といった回答もあり、参加者にとって満足度が非常に高い内容であったと考えられる。今回のプレ・エントランスデーは、推薦入試で合格した生徒が「4月の入学が楽しみになる」、「ワクワク感を醸成する」ことを目標に初めて実施したプログラムであったが、多くの参加者が「楽しかった」「友達が出来て、入学が楽しみになった」と感じてくれたことがアンケート結果からも分かり、「入学への期待感の醸成」という実施目標は、十分に達成できたと考えられる。

2. 追跡調査等の結果

(1) 入学以前の状況

以上の実施直後に参加者から直接採取されたデータからは、年内追加開催について肯定的な反応が多いことが見て取れたが、ここからはその他のデータと突合させた分析を行う。分析の

主眼はあくまで12月の追加開催分への出欠による違いであるが、そもそも本学入学（予定）者の中でもこういった層が入学前教育の対象になっているのかを確認しておくことも有益と考えられるので、必要に応じて12月のプレ・エントランスデーの非対象者¹⁾との比較も行う。

まずは、入試データや入学前教育のeラーニングから得られたデータなどを用い、12月開催分への出欠等との関連を確認する。これは、12月の追加開催に参加しやすい者、参加しにくい者がどのような特徴を持っていたのかを確認する作業でもある。表3は、12月開催のプレ・エントランスデーへの出席者、欠席者、対象外の者における、高校の成績評定平均、入試区分と学科の組み合わせごとに標準得点化した年内入試における総合評価（基礎テスト、面接、実技などの合計点）、入学前教育のeラーニングで最初に取り組む実力テストの得点の要約統計量である。今回用いた入試データは、あくまで年内入試で収集された高校評定や総合得点であるため、年明けの一般入試等の受験者は分析対象から除外されている。また、実力テストも入

表3 12月の出欠等と高校評定、入試総合得点、基礎学力

変数	12月出欠等	人数	平均	標準偏差	中央値	ベア比較
高校評定平均	出席	928	4.07	0.49	4.1	A
	欠席	416	4.10	0.48	4.1	A
	対象外	119	3.93	0.54	3.9	B
	合計	1463	4.07	0.49	4.1	
入試の総合得点 (入試区分、学科別に標準化)	出席	905	0.03	0.97	0.02	A
	欠席	410	-0.07	0.89	-0.09	A
	対象外	109	0.00	0.91	-0.09	A
	合計	1424	0.00	0.94	-0.03	
国語実力テスト	出席	945	55.86	10.19	56	A
	欠席	423	54.63	10.56	54	A
	対象外	122	54.08	12.03	54	A
	合計	1490	55.37	10.47	54	
文系数学実力テスト	出席	756	35.13	17.53	33	A
	欠席	332	33.66	17.75	31.5	A
	対象外	117	34.97	21.12	31	A
	合計	1205	34.71	17.97	33	
理系数学実力テスト	出席	189	43.30	17.96	43	A
	欠席	91	41.76	18.04	43	A
	対象外	5	50.00	24.38	39	A
	合計	285	42.93	18.07	43	
英語実力テスト	出席	945	29.86	13.48	30	A
	欠席	422	30.23	13.49	30	A
	対象外	120	29.95	16.34	30	A
	合計	1487	29.97	13.73	30	

注：ベア比較は、ノンパラメトリックなSteel-Dwass検定（群間の平均順位の比較）の文字の接続レポートだが、パラメトリックなTukey-Kramer検定（群間の平均値の比較）のすべてのベアの比較でも同じ結果であった。

学前教育の対象者のみ受験するため、年明けの一般入試等の合格者のデータは無い。なお、以下の分析は2024年度入試の悉皆調査であるため、本来は統計的仮説検定を行う必要はないが、参考情報として分布の中心に統計的な差（有意水準5%）が見られたかどうかを、表右端の「ペア比較」の列に示している。

高校評定平均の分布は、そもそも高校間で異なる基準で付されるため測定としての信頼性・妥当性には留意すべきではあるが、出席者と欠席者との間に差は見られなかった。なお、そもそも12月のプレ・エントランスデー非対象者（日程が遅い年内入試の合格者）は、年内入試合格者の中ではわずかに低くなっていた。現状では、12月追加開催のプレ・エントランスデーの対象者は、年内入試組の中において高校の成績が比較的高い者たちと言えるかもしれない。

入試における総合得点は、その受験者がどの程度評価されたかを示す指標のはずである。ただし、入試の日程や学科ごとに試験科目や配点等が異なるため、素点の比較には意味がない。そこで、各選抜の最小単位ごとに標準化を行い、入試の選抜区分が異なってもある程度比較可能な尺度に変換した。標準化の過程で平均値が0となるように変換されるため、表中でも平均値や中央値はほぼ0であるが、実際に群間に統計的な有意差はなかった。つまり、年内入試の合格者の中では相対的に評価が高かった者ほど12月の追加開催分にも参加していた、といった傾向はなかったことになる。ただし、そもそも選抜の区分毎に受験倍率や試験科目（＝評価されるものの質）等が異なるので、あくまで参考程度に考えるべきである。

国語、数学（文系、理系別）、英語の実力テストでは、統計的に有意な群間の差異は見られなかった。入学前教育に取り組み始める時点での基礎学力の水準によって、12月の追加開催

表4 高校ランクと12月の出欠

高校ランク	12月出欠					
	欠席		出席		合計	
	度数	行%	度数	行%	度数	行%
A	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
B	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%
C	0	0.0%	7	100.0%	7	100.0%
D	15	25.9%	43	74.1%	58	100.0%
E	18	16.1%	94	83.9%	112	100.0%
F	84	32.7%	173	67.3%	257	100.0%
G	173	31.2%	382	68.8%	555	100.0%
H	94	32.2%	198	67.8%	292	100.0%
I	6	85.7%	1	14.3%	7	100.0%
不明（廃校・統合等）	31	41.3%	44	58.7%	75	100.0%
合計	421	30.9%	943	69.1%	1364	100.0%

に出席するかどうか左右されるという傾向はなかったことになる。ただし、理系数学では該当者が少なすぎたためにこのような結果になった可能性もある。

表4は、受験産業の定義する高校ランク（入学難易度）別に、12月の出欠を集計したクロス表である。ここでは特に、12月のプレ・エントランスデーの対象者の出欠の比率を高校ランク別に比較することが重要なので、対象外だった者は集計から除外している。高校ランク上位は該当人数がかなり少ないことに留意が必要だが、概ね高校ランク上位の出身者ほど出席しやすく、高校ランク下位の出身者ほど欠席しやすい傾向が読み取れる。特に、高校ランクEとFの間で出席率に16.6%（83.9%-67.3%）もの差が生じていた。不明（廃校・統合等）の区分も出席率が58.7%と低いが、この区分に該当する高校が多数の受験者を集める高校ランク上位の学校だったとは考えにくいので、高校ランク下位が中心のグループと考えられる。先ほどから示されているように、各高校内での成績、入試当日の評価、入学前教育開始時点の基礎学力においては、出席者と欠席者に特段の差異は見られなかった。だとすると、個人レベルの学力差よりも、所属する高校の違いが、出欠に影響を与えている可能性が示唆される。

表5は、生徒の出身地（都道府県）別の12月の出欠状況である。ただし、合格者が極めて少ない都道府県も多数あり、各道府県別の集計を提示してもあまり意味がない。そこで、大学所在地からの距離に応じた4区分に分けて集計した。ここでも、そもそも対象外だった者も含んだ比率にはあまり意味はないので、出席者と欠席者だけの2群で比率を表示している。人数的にも大学が所在する福岡県の出身者が圧倒的に多いが（1,373人中、928人）、出席の比率も73.9%と高かった。隣県（佐賀、熊本、大分、山口）は出席が63.8%、その他九州（長崎、鹿児島、宮崎）は55.2%、人数も少ない（24人）その他遠方（沖縄含む）は45.3%と、概ね本学所在地からの距離が遠くなるにつれて、出席率が低下していた。

（2）新入生調査に見る傾向

次に、新入生調査のデータから検討を試みる。本学の新入生は、4月1日の入学式直後のガ

表5 出身都道府県と12月の出欠

出身地	12月出欠				合計	
	欠席		出席			
	度数	行%	度数	行%	度数	行%
福岡県	242	26.1%	686	73.9%	928	100.0%
隣県（佐賀，熊本，大分，山口）	79	36.2%	139	63.8%	218	100.0%
その他九州（長崎，鹿児島，宮崎）	78	44.8%	96	55.2%	174	100.0%
その他遠方（沖縄含む）	29	54.7%	24	45.3%	53	100.0%
合計	428	31.2%	945	68.8%	1373	100.0%

イダンスにおいて、新入生調査に回答することになっている。この調査では、第一志望だった大学や学部、各種広報媒体や受験生向けイベントに対する評価、学生生活で取り組みたいことなどを尋ねている。新入生が一堂に会する機会に対面で実施され、未回答者へは回答催促も行うため、最終的な回答率は例年100%に近い。今回は特に、入学前教育への参加と関連する可能性が考えられる変数として、大学生活を始めるにあたっての不安と、高校3年生の時の学習時間に関する変数と、12月開催分への出欠等との関連を検討する。

表6に示すように、「基礎学力が不足しており、大学の授業についていけない」「学習時間が不足しており、大学の授業についていけない」「4年間で卒業できるか不安だ」といった主に学業面に関する不安について、12月の出席者と欠席者の間に差は見られない。ただし、対象外だった者（大半は年明け後の入試）との比較では、学業面の不安は12月の出欠に関わらず

表6 12月の出欠等と新入生調査での回答

変数	12月出欠等	人数	平均	標準偏差	中央値	ペア比較
基礎学力が不足しており、 大学の授業についていけない	出席	943	2.79	0.97	3	A
	欠席	421	2.86	0.96	3	A
	対象外	1255	2.41	0.98	2	B
	合計	2619	2.62	0.99	3	
学習時間が不足しており、 大学の授業についていけない	出席	943	2.63	0.92	3	A
	欠席	421	2.71	0.90	3	A
	対象外	1255	2.34	0.94	2	B
	合計	2619	2.50	0.94	3	
4年間で卒業できるか不安だ	出席	943	2.43	1.06	2	A
	欠席	421	2.51	1.05	3	A
	対象外	1255	2.22	1.02	2	B
	合計	2619	2.34	1.05	2	
友人ができるか不安だ	出席	943	2.41	1.08	2	A
	欠席	421	2.57	1.04	3	B
	対象外	1255	2.78	1.06	3	C
	合計	2619	2.61	1.08	3	
入学満足度	出席	943	4.89	1.29	5	A
	欠席	421	4.74	1.35	5	A
	対象外	1255	4.46	1.18	5	B
	合計	2619	4.66	1.26	5	
大学合格前の週あたりの学習時間	出席	943	4.79	6.24	2	A
	欠席	421	4.13	5.38	2	A
	対象外	1255	9.82	9.26	7.5	B
	合計	2619	7.09	8.16	4	

注：不安に関する変数は「1=あてはまらない」から「4=あてはまる」の4段階。「入学満足度」は、「1=とても不満」から「6=とても満足」の6段階。ペア比較は、ノンパラメトリックなSteel-Dwass検定（群間の平均順位の比較）の文字の接続レポートだが、パラメトリックなTukey-Kramer検定（群間の平均値の比較）のすべてのペアの比較でも同じ結果であった。

大きい。また、表6の一番下の「大学合格前の週あたりの学習時間」も、12月の出席者と欠席者の間に差はないが、対象外だった者との間には差があり、対象者（出席者と欠席者）は対象外の者の半分ほどしか学習時間を確保していなかった。この設問は、高校時代における学業への最大努力量を示していると言え、上記の学業面の不安と共に、入学前教育の対象者である年内入試合格者の特性を反映していると考えられる。

他方で、「友人ができるか不安だ」の値は、12月開催分のプレ・エントランスデー非対象者、次に欠席者の順に高く、出席者が最も低かった。12月開催分のプレ・エントランスデーは、友達作りを目的としていた。出席者において友人に関する不安が低いということは、事業の目的に適った結果が得られていると解釈できそうである。また、12月開催分が対象外の者は、大半が2月のプレ・エントランスデーも対象外であるため、入学前に同級生と顔を合わせる機会は、元々同じ高校の同級生だった場合などを除き、12月の対象者よりも限られている。12月分が対象外の者は、大半は2月のプレ・エントランスデーの対象者でもある12月の欠席者よりも、入学前に友人を作る機会が少ないはずであり、友人関係の不安が強いのは、好ましくはないとしても、妥当な結果と言える。

入学満足度は、12月の出席者と欠席者の間に差は見られなかったが、対象外の者の方が若干低かった。12月の対象者は専願であるはずの入試区分による入学予定者であり、他大学との併願も多いであろう対象外の者よりも、第一志望の大学に入ったという感覚が強いと考えられる。12月の追加開催分への参加は、もともと高めだった入学満足度をそれ以上に向上させたわけではなさそうである。

表7 12月の出欠等と1年生前学期終了時点の学業成績、出席率

変数	12月出欠等	人数	平均	標準偏差	中央値	ペア比較
1年生前学期 GPA	出席	945	2.46	0.71	2.54	A
	欠席	422	2.30	0.77	2.40	B
	対象外	1255	2.46	0.82	2.58	A
	合計	2622	2.43	0.77	2.54	
1年生前学期修得単位数	出席	945	21.26	4.17	22	A
	欠席	422	20.38	4.88	22	B
	対象外	1255	20.69	4.79	22	B
	合計	2622	20.84	4.60	22	
1年生前学期出席率	出席	945	0.88	0.11	0.91	A
	欠席	423	0.85	0.15	0.89	B
	対象外	1258	0.86	0.15	0.90	B
	合計	2626	0.86	0.14	0.90	

注：ペア比較は、ノンパラメトリックなSteel-Dwass検定（群間の平均順位の比較）の文字の接続レポートだが、パラメトリックなTukey-Kramer検定（群間の平均値の比較）のすべてのペアの比較でも同じ結果であった。

(3) 1年生前学期終了時点の学業成績、在籍状況等

続いて、1年生前学期終了時点の学業成績や在籍状況を確認する。入学半年後のデータではまだ大きな差が表れない可能性もあるが、2024年12月には2年目の実施を控えた本稿執筆時点で用いることができるのは、2024年9月時点のデータしかない。

表7は、12月の出欠等の状況別に学業成績等を示した一覧である。GPAは、12月の出席者と対象外の者との間に差はないが、欠席者で若干低い。出席者および対象外の者と、欠席者の平均値の差は0.16 (2.46-2.30) である。

修得単位数は、12月の欠席者と対象外の者の間に差はないが、出席者で若干高い。欠席者と比べると、出席者の平均値は0.88 (21.26-20.38) 高い。先ほどのGPAの差と併せ見れば、出席者と欠席者の学業成績には、大きくはないが差があると考えてよいだろう。しかも、単位を取りそろえるという点では、出席者は対象外の者に勝るとも劣らない。

授業出席率も、12月の欠席者と対象外の者との間に差はないが、出席者で若干高い。欠席者と比べると、出席者の平均値は3%ポイント (0.88-0.85=0.03=3%) 高い。出席者の授業出席率の高さは、GPAや単位修得率の高さとも関連していると考えられるが、先述のように、入学前の学力などの分布には特段の差はなかった。となると、学校の行事にはしっかりと参加するといった規範意識が高い者が12月の出席者となり、それが入学後には授業出席率の高さとして、さらにはGPAの高さや修得単位数の多さとして観測されている可能性がある。

表8は、入学半年後の9月時点の学籍の状態である。12月の出席者では、(入学) 辞退、除籍、休学中などの者はおらず、全員が在学中である。欠席者では辞退が5人、休学中が1人で、98.6%が在学中である。12月分は対象外だった者では除籍が2人、休学中が1人で、99.8%が在学中である。明らかに12月の出席者の状況が一番良いが、これは、合格直後のプレ・エントランスデーの追加開催が除籍・退学等を効果的に防止しているからなのだろうか。残念ながら、このようなナイーブな観測に基づく推論は、おそらく誤りであろう。むしろ、専断であるはず

表8 12月の出欠等と入学半年後の在籍状況

在籍状況	12月の出欠等							
	出席		欠席		対象外		合計	
	度数	列%	度数	列%	度数	列%	度数	列%
辞退	0	0.0%	5	1.2%	0	0.0%	5	0.2%
除籍	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%	2	0.1%
休学中	0	0.0%	1	0.2%	1	0.1%	2	0.1%
在学中	945	100.0%	422	98.6%	1255	99.8%	2622	99.7%
合計	945	100.0%	428	100.0%	1258	100.0%	2631	100.0%

の年内入試の合格者の中に本学を本気で志望していたわけではない者が一定数おり、そうした者は12月のプレ・エントランスデーも欠席しやすく、さらにその一部が入学も辞退したと考えるのが自然である。

IV. まとめと今後の課題

本稿では、年内に追加開催（新たな内容で再開）することになったプレ・エントランスデーについて、開催に至る経緯、入学前教育全体の中での位置づけ、実施までの準備や当日の内容、その効果などを整理してきた。冒頭でも述べた通り、入学前教育の開発や効果の検証は、大部分の大学に共通する課題である。本稿は、比較的大規模な地方私立大学において、合格直後に来校型のプレ・エントランスデーを参加必須ではない形で追加開催した事例の記録として意義がある。

追跡調査の結果から示唆される主だった知見を整理したい。

合格直後のプレ・エントランスデーへの参加者は、入学後の学業成績も悪くなく、総じて「まじめ」であった。ただし、12月開催分に参加したことが彼ら・彼女らを「まじめ」にしたというよりも、「まじめ」ではなかった者が欠席者のほうに偏っていた、という解釈も可能である。12月の参加者に「友人ができるか不安だ」と入学時に感じているものが少ないという点については、「元々友達ができるか不安ではないので、入学直後のプレ・エントランスデーは出席する」という方向での因果関係は常識的に考えられないため、参加による効果と判断しても問題はないと思われる。しかしながら、今回のデータだけで学業成績の向上や除籍・退学の防止などへの効果を判断するのは拙速であろう。後述のように、結論を下すには更なる検討が必要である。

12月開催分への出欠に影響する要因として、居住地（キャンパスからの距離）はおそらく最も明瞭なものと言ってよいだろう。たった一日だけのプレ・エントランスデーのために、交通費、宿泊費、移動時間を費やして遠方から参加することの負担を考えれば、妥当な結果だと考えられる。ただし、入学前にキャンパスやその周辺の雰囲気把握したり、同級生と知り合いになったりすることのメリットは、遠方からの参加者ほど大きい可能性がある。だとすれば、遠方からの進学予定者ほど欠席が多いという現状は、仕方がないことではあるが、望ましいとは言えないだろう。もしも遠方からの参加率を高めることが真に必要なのであれば、そのための施策を検討すべきなのかもしれないが、遠隔地からの参加者に対する旅費の補助や、来学の機会を生かした学生寮の見学会は、既に実施されている。施策の強化はコストパフォーマンス

も考慮して慎重に検討する必要があるだろう。

また、各高校内での成績（評定）、大学合格前の学習時間、入試における総合得点、入学前の基礎学力などは12月の出欠と関係がなかったにもかかわらず、高校ランク上位の出身者ほど出席率が高い等の傾向も見られた。本稿の目的から外れるので詳細は割愛するが、別途集計を行ったところ、高校ランク上位の出身者ほど大学合格前の学習時間が長い、入試における総合得点やeラーニングの実力テストの得点が高いといった傾向が確認できた。にもかかわらず、全体としては、そういった入学前の学力や学習時間は、12月の出席とは関連が見られない。これらの点からは、個人レベルの学力などではなく、出身高校が異なること自体が、出欠に影響している可能性が示唆される。そもそも、義務教育の最終段階で選抜を経なければ高校に進学できない日本の高校の実態は、「制度が隔離する高校生活」²⁾と言われるほど、格差に富んだものである。生徒たちの学びに対する姿勢や、入試制度が彼ら・彼女らに与える影響も、進学校と進路多様校では大きく異なる³⁾。学校単位の平均で見ると、授業の雰囲気、学ぶ喜び、協同姿勢（の有無）、成功へのこだわり、学校への帰属意識、放課後の時間の使い方、中退の有無といった、「生徒文化」や「学校文化」、あるいは「隠れた（潜在的）カリキュラム」と呼ばれるような集合的な規範や価値意識も、学力偏差値や生徒の出身家庭の社会経済的地位の高低と、強い相関がみられることが知られている⁴⁾。だとすれば、進学予定の大学の行事には（例えそれが必須でないとしても）参加するのが当然であるといった規範の強弱が、生徒が所属する高校によって異なり、それが12月開催分への出欠に影響している可能性が考えられる。この解釈は、先述のように、12月の参加者は基礎学力等が高いわけではないが入学後の授業出席率が高いなど「まじめ」であるという傾向とも整合的である。もしこの解釈が妥当だとすれば、合格直後のプレ・エントランスデーへの参加率自体を向上させたいのであれば、入学予定者はもちろん、保護者や高校側にもプレ・エントランスデーを複数回開催する意義を十分に周知し、参加の重要性を高校ランクに関係なくしっかりと認識させる必要があるだろう⁵⁾。

さて、紙幅の制約もあり、本稿では12月の出欠等を基準とした単純なクロス集計や平均値等の比較しか行っていない。確かに、12月の出席者の入学後半年時点の学業成績等が好調であるという事実や、出席者の方が入学時点の交友関係面での不安が小さいという事実は、それ自体として重要ではある。しかし、入学前教育への参加（処置）と、その後の状況（結果）の両方に影響を及ぼす可能性のある様々な要因（共変量）を統制した分析ではないため、合格直後のプレ・エントランスデーの参加による因果効果をバイアスなく推定したことにはならない。また、今後さらにデータが蓄積されれば、異なる傾向が見いだされる可能性もある。より厳密な手法を用いた継続的な追跡調査が今後の課題である。

謝辞

プレ・エントランスデーの年内実施（再開）にあたり、鶴田所長をはじめ、基礎教育センター教職員の皆様、学生アシスタントの皆様には、準備段階から多大なご協力を賜った。特に江本係長には、全体を通じて細かくサポート役を担っていただいた。また、行正麻衣氏をはじめ大縄跳びの講師をしていただいた日本ジャンプロープ連合福岡県支部の皆様のお力添えや、学生広報キャスターの頑張りがなければ、今回のようなプログラムの雰囲気は醸成できなかった。全く新しいコンセプトでプログラムを構築するには多大な苦労もあったが、プログラムを無事に実施できたのは、多くの方々の協力のおかげである。記して感謝申し上げたい。

注

- ¹⁾ 入学（予定）者全体の中では、12月分が対象外の者の大半は、年明けの一般入試等による合格者を意味するが、入試日程が遅いため合格通知が12月の開催日に間に合わない総合型選抜（資格型、スポーツ型）や外国人留学生選抜（海外特別現地選抜）が少数だが含まれる。
- ²⁾ 松岡亮二, 2021, 「制度が隔離する高校生活」中村高康・松岡亮二編著『現場で使える教育社会学：教職のための「教育格差」入門』ミネルヴァ書房, pp.82-100.
- ³⁾ 山村滋・濱中淳子・立脇洋介著, 2019, 『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか：首都圏10校パネル調査による実証分析』ミネルヴァ書房.
- ⁴⁾ 松岡亮二, 2019, 『教育格差：階層・地域・学歴』ちくま新書.
- ⁵⁾ こうした周知活動は、長期的な大学のイメージ向上のためにも重要と考えられる。